



# 福田寺遺跡発掘調査報告書

(3次調査)

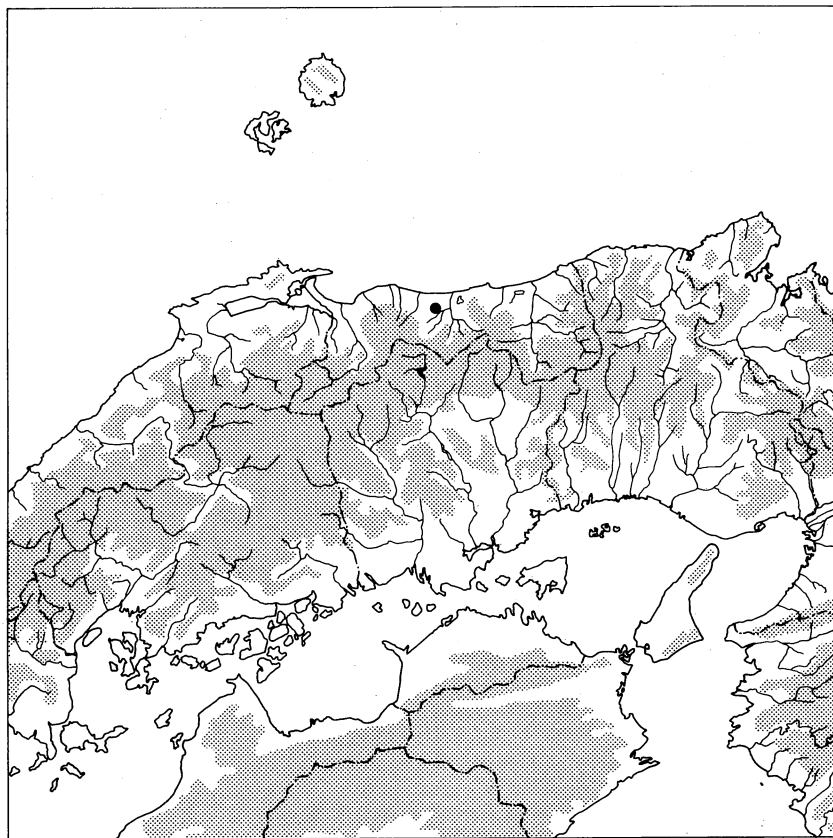
平成11年度

倉吉市教育委員会



ふく だ じ  
福田寺遺跡発掘調査報告書

(3次調査)



遺跡略号 3NYF・3

平成11年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572866

## 序

この報告書は、鳥取中央農業共同組合横田物流センター増設工事に伴う事前調査として、倉吉市教育委員会が平成11年度に倉吉市横田字福田寺において実施した発掘調査の記録です。

福田寺遺跡は、倉吉市有数の畑地帯が広がる久米ヶ原丘陵中腹に所在し、弥生時代中期から奈良時代にかけての遺物散布が認められるところとして知られていますが、近年小面積ながら2回の発掘調査を実施し、弥生時代中期の集落や奈良時代の集落を確認しております。3回目にあたる今回の調査では、検出した遺構は少ないものの弥生時代中期の住居や貯蔵穴を検出し、集落跡の一部を確認することができました。この報告書が多くの方々に活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたりご協力いただきました鳥取中央農業共同組合ならびに地元の方々をはじめ、関係各位に対し心から謝意を表する次第であります。

平成12年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足 羽 一 昭

## 例 言

- 1 本報告書は、平成11年度に倉吉市教育委員会が、鳥取中央農業協同組合横田物流センター増設工事に伴う事前調査として、鳥取県倉吉市横田字福田寺において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団 長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）  
調 査 委 員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）  
調 査 員 根鈴 輝雄（倉吉博物館主任学芸員） 森下 哲哉（文化財係主任）  
根鈴智津子（文化財係主事） 加藤 誠司（文化財係主事）  
岡本 智則（文化財係主事） 岡平 拓也（文化財係主事）  
調査補助員 山根 雅美・松田 恵子  
事 務 局 波田野頌二郎（教育次長）  
眞田 廣幸（文化課課長） 藤井 晃（文化財係係長）  
藤井 敬子（文化財係主任） 山崎 昌子（文化財係主事）  
金田 朋子（臨時職員）  
内 務 整 理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松嶋 あつ子・竹歳 暁子・山本 錦
- 3 現場での調査は森下が担当した。遺構の図面整理は森下・松田が担当した。遺物実測は森下が担当した。遺物写真は森下が担当し、松嶋・竹歳・山本が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が担当した
- 4 本書の執筆は森下が担当した。編集は森下・松田が担当した。
- 5 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1：25,000地形図「倉吉」・「関金」の一部を複製・加筆したものである。第2図（地形図）は、平成9年修正測量の1：2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。
- 6 挿図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第V座標系の北を示す。
- 7 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。
- 8 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。



## 本文目次

I 発掘調査に至る経過	1
II 位置と歴史的環境	1
III 調査の概要	4
1 遺構	5
2 遺物	8
IV まとめ	13
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	2
第2図 福田寺遺跡（3次）調査区位置図	3
第3図 福田寺遺跡（3次）遺構全体図	4
第4図 1号住居遺構図	5
第5図 1号・2号貯蔵穴遺構図	6
第6図 1号～3号溝状遺構遺構図	7
第7図 1号住居・1号貯蔵穴出土遺物	9
第8図 2号貯蔵穴出土遺物	10
第9図 石製品	11

## 図版目次

図版1 遺跡 調査後全景	
図版2 遺構 1号住居 1号貯蔵穴 2号貯蔵穴	
図版3 遺構 1号溝状遺構検出面 1号溝状遺構完掘 2号溝状遺構検出面	
図版4 遺構 2号溝状遺構完掘 3号溝状遺構検出面 3号溝状遺構完掘	
図版5 遺物 土器	
図版6 遺物 土器・石製品	
図版7 遺物 石製品	

## I 発掘調査に至る経過

福田寺遺跡3次調査は、倉吉市教育委員会文化課が鳥取中央農業協同組合横田物流センター増設工事に伴って実施した調査である。福田寺遺跡は今回の調査で3回目の調査である。

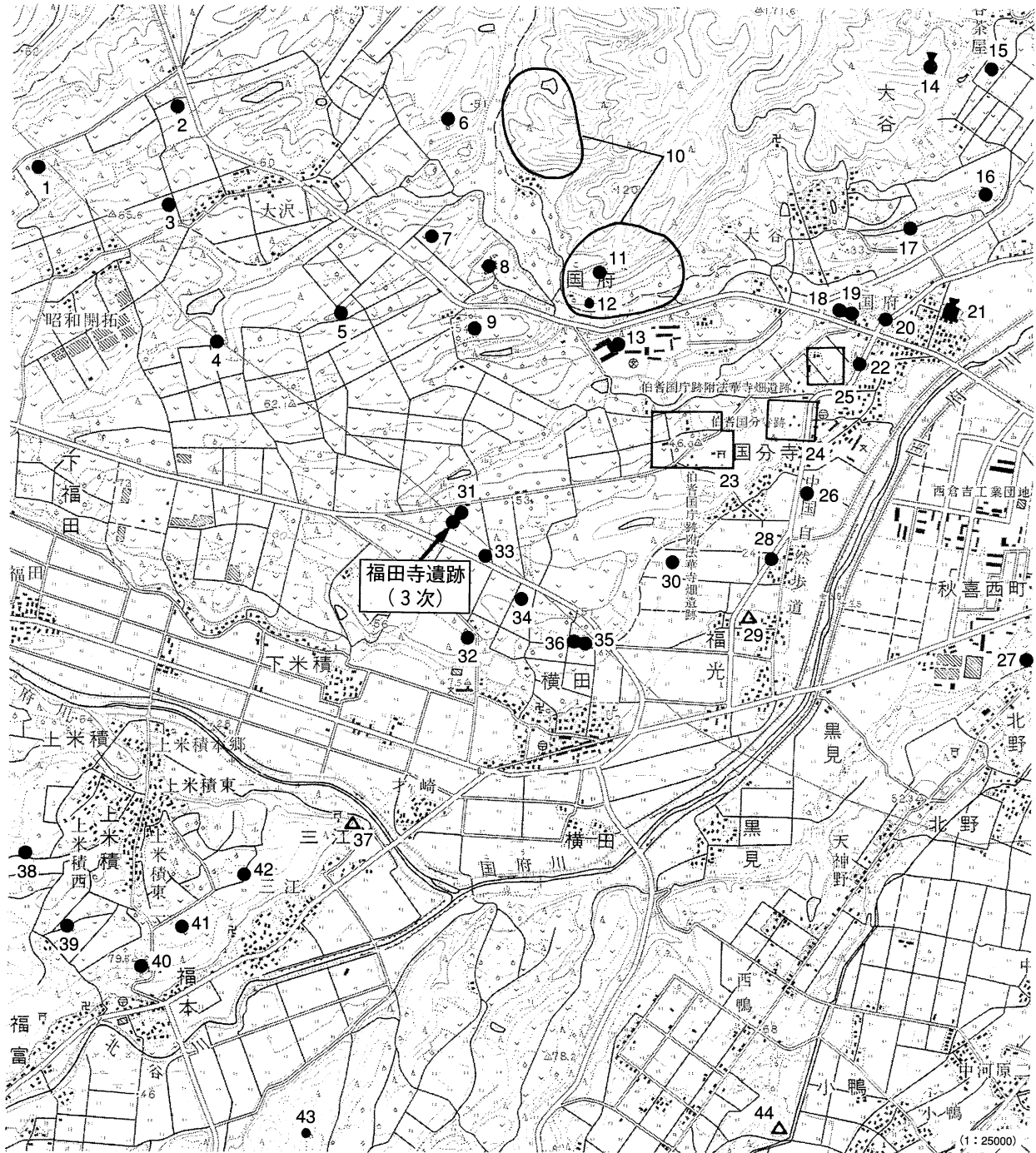
平成10年10月、鳥取中央農業協同組合代表理事組合長塚本富秋から現在横田にある生産資材倉庫及び横田物流センターが手狭になったことにより、同建物の増設工事の計画の提示があり、合わせて建設予定地における埋蔵文化財の存在有無の問い合わせがあった。計画では、現在の生産資材倉庫（昭和50年に西瓜選果場として建設された建物）の南側に新たに建物を増築するということであった。この計画地内は福田寺遺跡1次調査において弥生時代中期の集落跡を確認した遺跡地であり、建物予定地部分は昭和50年当時の協議において遺構面の保存が行われ、表土のみの削平による駐車場の造成がなされた範囲であった。遺跡の遺存状況と広がりを確認するため開発事業に先立ち事前の試掘調査を実施することとなり、平成11年4月20日～5月13日まで国・県の補助を受けて実施した。その結果、溝状遺構と共に弥生土器・土師器・石製品などの弥生時代の遺物が出土し、遺跡の遺存状況が明らかとなった。

倉吉市教育委員会文化課は、試掘調査の結果をもって鳥取中央農業協同組合と協議し、変更が困難であった建物建設部分の1,500㎡について事前に発掘調査を実施することとした。調査は、倉吉市教育委員会文化課が主体となり、鳥取中央農業協同組合の委託をうけて平成11年10月4日～平成11年12月9日まで現地調査を実施した。

## II 位置と歴史的環境

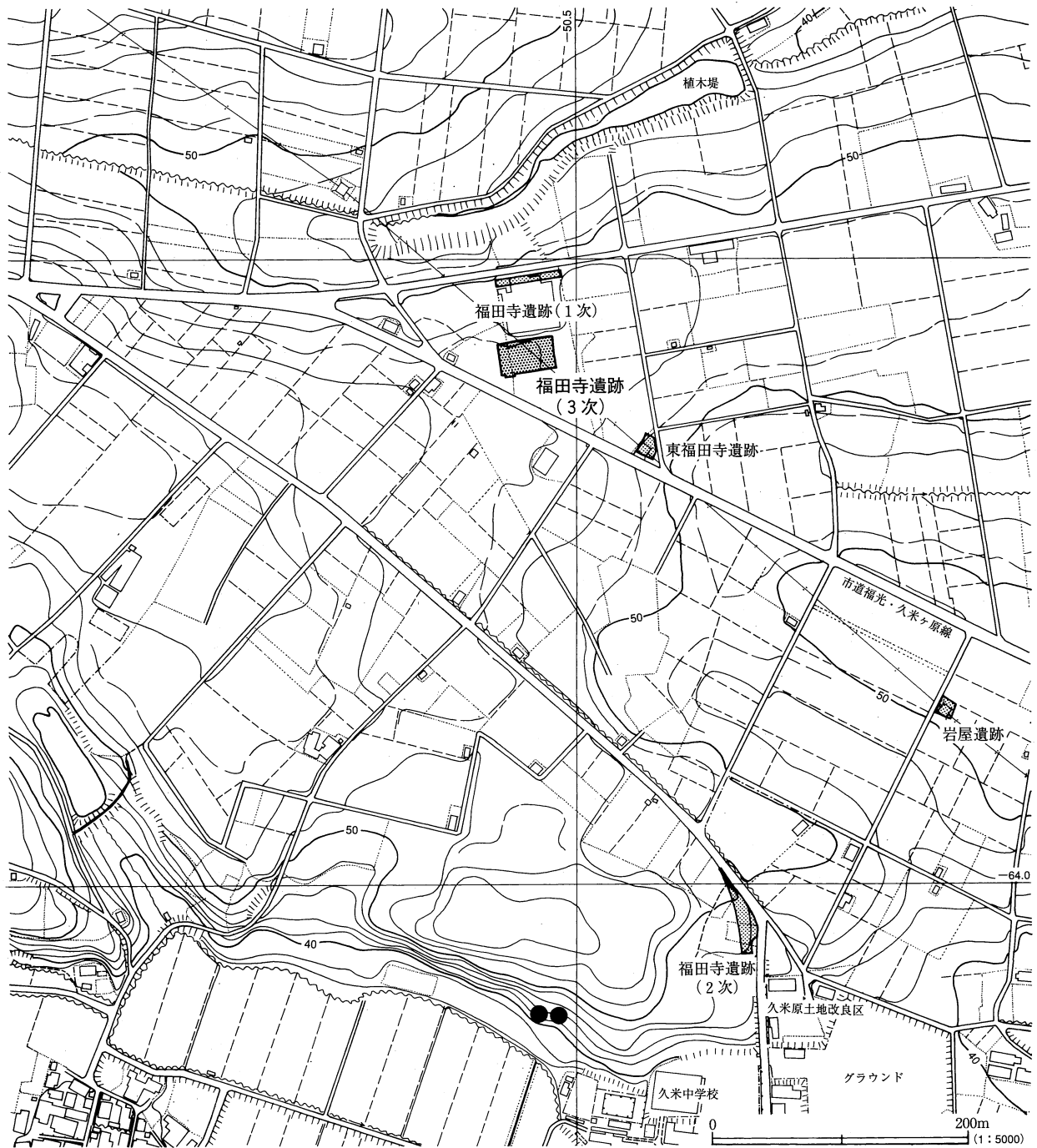
福田寺遺跡3次調査は、倉吉市街地の西方に約4km離れた倉吉市横田字福田寺に所在する。弥生時代中期の集落跡の一部を確認した遺跡である。そこは通称久米ヶ原丘陵と呼ばれる大山（標高1711m）の火山活動によって形成された火山灰台地の洪積世丘陵であり、なだらかな起伏をもって南西から北東へ広がりを見せる。遺跡は、標高53m付近の平坦な丘陵尾根部分に位置し、丘陵の北側には植木堤を有する小さな谷が入り組みゆるやかな斜面が広がる。同じ丘陵尾根の北東側20m付近には昭和50年度に発掘調査が行われた福田寺遺跡1次(31)調査地点が所在する。1次調査は市道国分寺・桜線に沿うように調査が行われ、弥生時代中期中葉の弥生土器とともに4基の土壙を検出し、周辺に存在するであろう弥生時代中期の集落を明らかにした。また本遺跡の南東200mの丘陵南側縁辺部には平成9年度に発掘調査を実施した福田寺遺跡2次(32)調査地点が所在する。2次調査は市道横田久米ヶ原線の改良工事に伴って実施した調査であり、調査の結果古墳時代から奈良時代の住居と祭祀遺物が出土した土壙を検出し、古墳時代から奈良時代にかけての集落の存在が明らかになった。このことは同じ丘陵縁辺部に所在する古墳時代から奈良時代の集落跡の横田矢戸遺跡(35・36)との関連を位置づけた。

倉吉市西郊の遺跡分布状況を福田寺遺跡が所在する久米ヶ原丘陵を中心に概観すると、旧石器時代や縄文時代の遺跡は少なく、弥生時代から古墳時代の遺跡が多く分布する。弥生時代の集落は、天神川が形成した沖積平野の下流域に長瀬高浜遺跡や松ヶ坪遺跡といった前期の集落が存在するが継続せず、久米ヶ原丘陵でも土器の確認はあるものの集落は確認されていない。中期になると、福田寺遺跡1次調査や中尾遺跡1次(16)などが知られている。同じ中期の遺跡には高城山裾野に広がる舌状台地をV字状の溝で区画する環濠を伴う環濠集落の後中尾遺跡が所在する。後期になると、人口の増加を物語るかのように急激に集落の増加が認められ、久米ヶ原丘陵でもその傾向がうかがえる。遺跡には中期から続く中尾遺跡のほか遠藤谷峯遺跡(7)・中峯遺跡(9)・白市遺跡(8)・服部遺跡・大沢前遺跡(5)・両長谷遺跡(6)などが出現する。これらの集落は、そのほとんどが古墳時代



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

- |          |             |           |            |            |
|----------|-------------|-----------|------------|------------|
| 1 昭和開拓遺跡 | 10 古墳群      | 19 打塚遺跡   | 28 今倉遺跡    | 37 三江城跡    |
| 2 矢内谷峰遺跡 | 11 大谷後口谷墳丘墓 | 20 擲塚遺跡   | 29 今倉城跡    | 38 箕ヶ平遺跡   |
| 3 高峰遺跡   | 12 白市窯跡     | 21 国分寺古墳  | 30 嶋ノ掛遺跡   | 39 後口谷遺跡   |
| 4 大道谷遺跡  | 13 向野遺跡     | 22 宮ノ下遺跡  | 31 福田寺遺跡1次 | 40 福本家ノ上古墓 |
| 5 大沢前遺跡  | 14 大谷大将塚古墳  | 23 伯耆国衙跡  | 32 福田寺遺跡2次 | 41 晩田遺跡    |
| 6 両長谷遺跡  | 15 小林古墳群    | 24 伯耆国分寺跡 | 33 東福田寺遺跡  | 42 上野遺跡    |
| 7 遠藤谷峯遺跡 | 16 中尾遺跡1次   | 25 法華寺畑遺跡 | 34 岩屋遺跡    | 43 管ヶ谷口たたら |
| 8 白市遺跡   | 17 中尾遺跡2次   | 26 河原毛田遺跡 | 35 矢戸遺跡1次  | 44 市場城跡    |
| 9 中峯遺跡   | 18 古神宮古墓    | 27 八幡平ラ遺跡 | 36 矢戸遺跡2次  |            |



第2図 福田寺遺跡（3次）調査区位置図

まで継続しており、長期間にわたり集落が営まれていたことを物語っている。また後中尾遺跡が存在する高城山山麓には、後中尾遺跡とともに後期の後口谷遺跡(39)や箕ヶ平遺跡(38)、小谷遺跡などが存在する。そして墳墓には、後中尾遺跡他の高城山周辺の集落に関連するように、倉吉市下福田に3基の四隅突出型墳丘墓を検出した国指定史跡の阿弥大寺墳丘墓群が存在し、中峯遺跡や遠藤谷峯遺跡等を見下ろす四王寺山南西丘陵の先端部には大谷後口谷墳丘墓群(11)が存在し集落遺跡との関連を物語る。

古墳時代の集落では、久米ヶ原丘陵上に服部遺跡・遠藤谷峯遺跡・中峯遺跡・白市遺跡・大沢前遺跡といった弥生時代後期から続く集落跡とともに、宮ノ下遺跡(22)・擲塚遺跡(20)・大道谷遺跡(4)・矢戸遺跡といった新たな集落が営まれるようになった。そして高城山周辺には、後中尾遺跡や後口谷遺跡・晩田遺跡(41)が存在する。

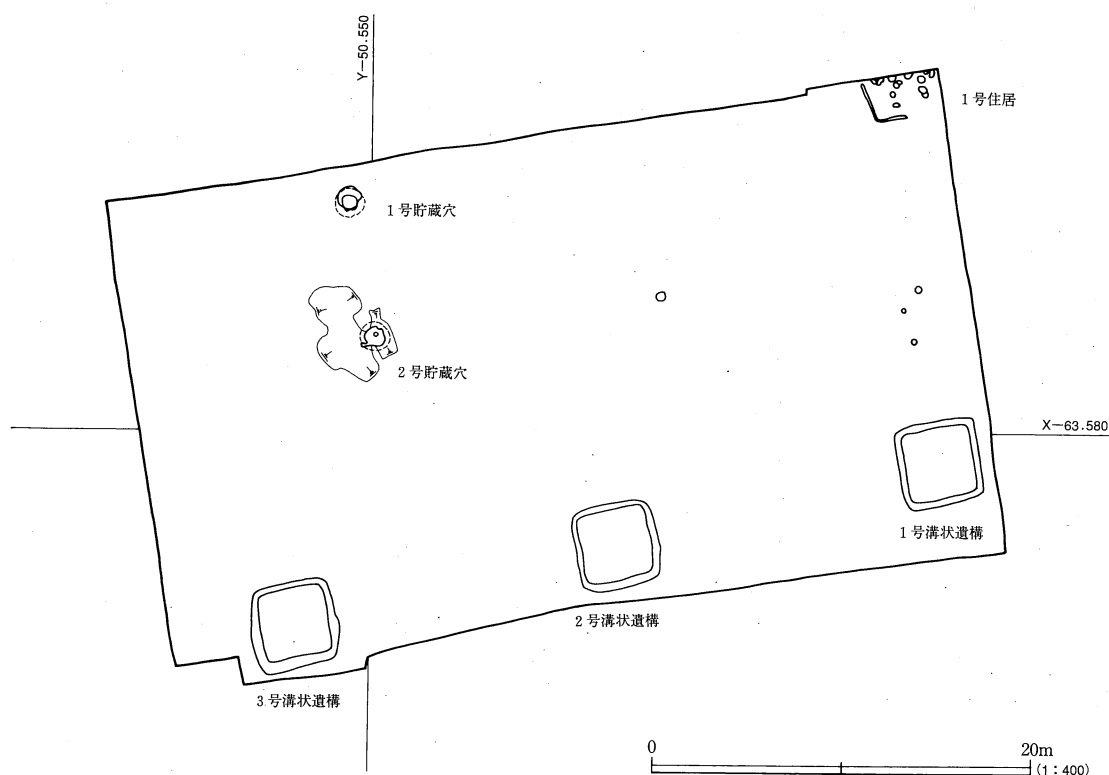
古墳は、久米ヶ原丘陵東端の国府川左岸に前期古墳の国分寺古墳(21)や上神大將塚古墳・大谷大將塚古墳(14)が存在し、四王寺山周辺、上神周辺、そして南側の高城山周辺に後期の古墳群が存在する。

さらに奈良時代には、この久米ヶ原丘陵の東端周辺に伯耆国衙(23)・伯耆国分寺(24)、そして伯耆国分尼寺とされる法華寺畑遺跡(25)が近接して設けられ、伯耆国の政治・経済・文化の中心地となる。また国府川に沿った久米ヶ原丘陵末端の不入岡地区には、東西に長い長大な大型掘立柱建物が並列する不入岡遺跡が存在し、伯耆国の物資収納施設と考えられている。集落跡は、不入岡遺跡・平林遺跡・矢戸遺跡などが確認されている。平安時代になると、久米ヶ原丘陵の谷を隔てた北側の四王寺山山頂に四天王像を祀る四王寺が建立された。鎌倉時代から室町時代の遺跡は城跡以外はあまり知られていないが、集落跡として14～15世紀代に営まれた福光に所在する今倉遺跡(28)が知られている。

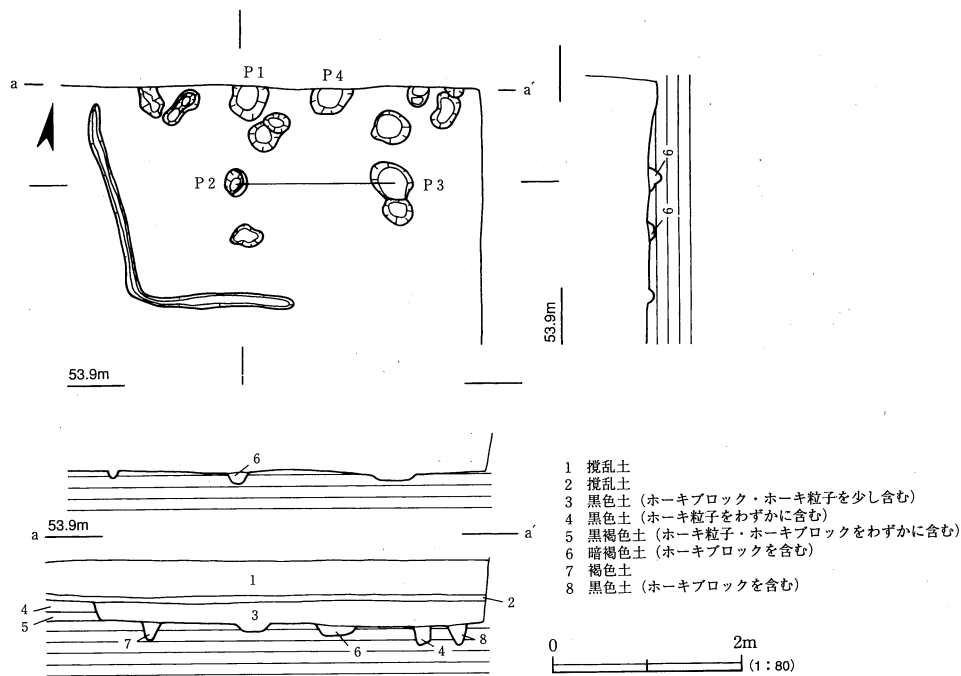
### Ⅲ 調査の概要

発掘調査は、鳥取中央農業協同組合が計画する生産資材倉庫・物流センター増築工事に伴うものであり、増築される建物部分という限られた面積を調査した。発掘調査面積は1,500㎡であった。調査は、調査区の大部分を占める資材倉庫駐車場のコンクリートを重機による削平後、表土を除去し黒色土層を掘り下げて遺構検出作業を行った。調査区内の基本層序は上層より、Ⅰ表土(耕作土)・Ⅱ黒色土・Ⅲ暗茶褐色土(漸移層)であったが、大部分はⅠ層の表土とⅡ層の黒色土上面が大きく削平されており、黒色土の下層部分からの確認であった。遺構の検出は地山面の黄褐色砂質土(ホーキ火山砂層)面でおこなった。

調査の結果、竪穴式住居1棟、貯蔵穴2基、溝状遺構3基、ピットを検出した。ピットは掘立柱建物としてのまとまりはない。



第3図 福田寺遺跡(3次)遺構全体図



第4図 1号住居遺構図

## 1 遺構

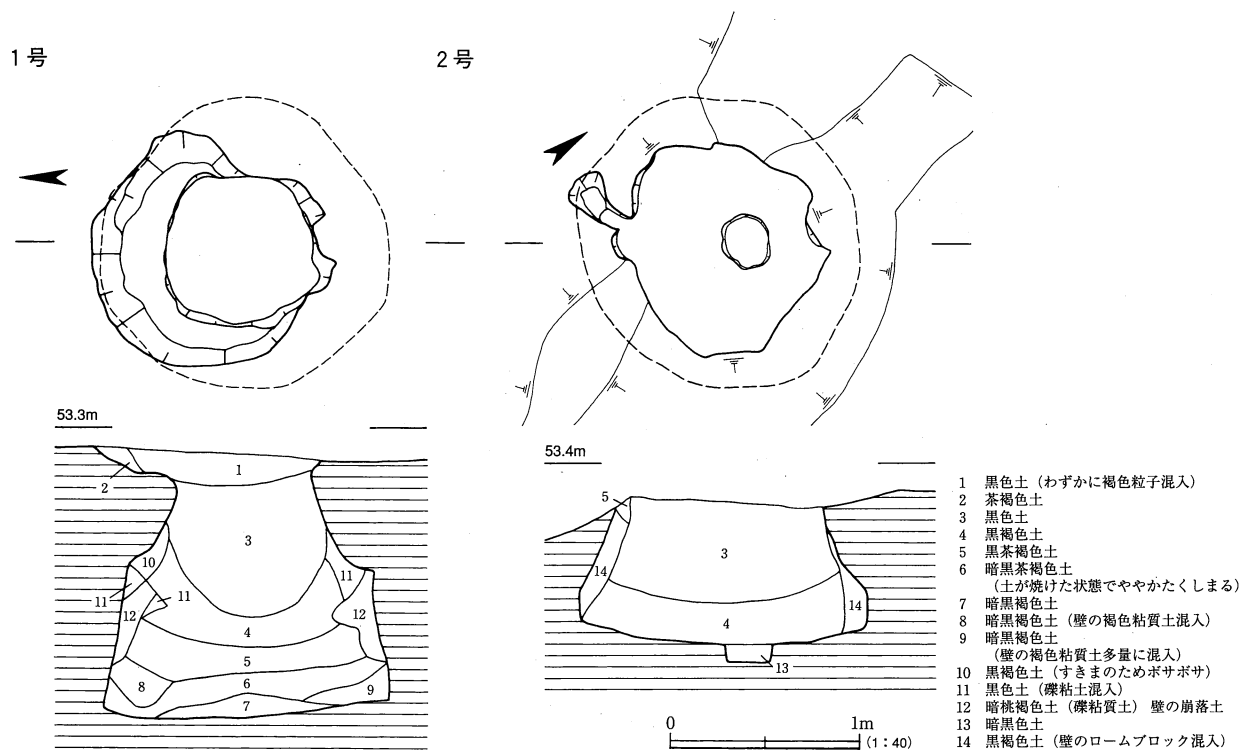
**1号住居** 調査区の北東隅に位置し、住居の南東及び北側は調査区外にかかる。黒色土を掘り下げた後に西側から南にかけて周壁溝の一部を確認したことで竪穴式住居と確認した。平面形は、検出した周壁溝の状況から方形を呈するものと判断できる。住居の規模は、検出した部分で東西3.5m・南北2.3mを測る。壁高は、黒色土層で住居の平面形を確認できなかったため不明であるが、断面に見られる壁高は0.2mを測る。周壁溝は遺存する西辺と南辺に一部残る溝から幅16~22cm、深さ5cm前後で巡るものと考えられる。住居に伴うピットは複数を検出したが、全体の配置は不明であるがこの内P1・P2・P3の3個が支柱穴の、そしてP4が中央ピットの可能性が考えられる。住居に伴う遺物は黒色土及びP1埋土から弥生時代中期の壺(1)・甕(2・3)が出土した。

**1号貯蔵穴** 調査区の北西に位置し、2号貯蔵穴の北側約7mに所在する。平面形は、検出面で南側の一部が崩落するもののその形状はやや隅が丸い方形を呈し、底面は一部角ばるものの不整形な円形を呈する。断面形は、開口部がすばまり底部が広がるいわゆる袋状を呈するが、底面から上に0.8m付近にかけては貯蔵穴壁がほぼ垂直に立ち上がり、円柱状の形態を示す。規模は検出面で、東西0.80m・南北0.78mを測り、北側で幅20cmの段を設ける。底面は東西1.53m・南北1.50mを測り、検出面からの深さは中央部分で1.4mを測る。底面積は1.8㎡であった。この底面には溝もピットも検出しなかった。

なお、この1号貯蔵穴は、底部付近の断面観察で自然堆積の層位を示すものの、下から2層目の第6層はその上面に行くほど焼けた土が堆積しており多くの焼土を含む。出土遺物はこの第6層を中心に前後の層の中から比較的多くの弥生時代中期の壺(4~6)・甕(7~15)・転用紡錘車(16)が出土した。

**2号貯蔵穴** 1号貯蔵穴の南側約7mに所在する。後世の攪乱により貯蔵穴の開口部分が大きく削平された状態で確認した。平面形は攪乱により開口部の形状は不明であるが、底面はほぼ円形を呈する。断面形は開口部が削られるが、開口部がすばまり底部がひろいいわゆる袋状を呈する。規模は、検出面で東西1.10m・南北1.01m、底面で東西1.61m、南北1.46mを測り、検出面からの深さは、中央部で0.75mであった。底面には、溝の存在はないものの、中央よりやや北側に直径0.25m・深さ0.1m前後の浅いピットを検出した。杭痕跡は未確認である。

遺物は1号貯蔵穴に較べると少ないが、ほぼ同時期の弥生時代中期の壺・甕が出土した。この他土器と共に石



第5図 1号・2号貯蔵穴遺構図

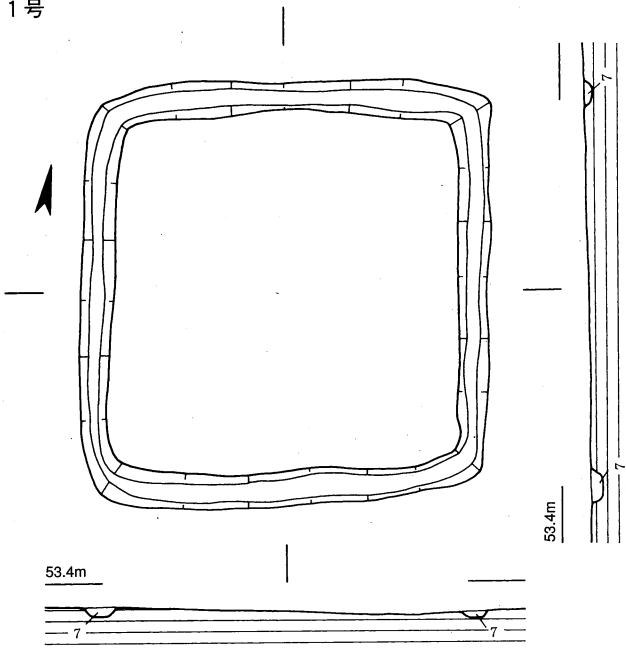
の作業台石 (S4) が出土したが、全体に火を受けており小片に破碎していた。

**1号溝状遺構** 調査区の南東側で検出した幅30cm前後の溝が方形に巡った遺構である。試掘調査の第1トレンチで確認した遺構であり、黒色土上面まで削平されていた駐車場部分であるため遺構検出は地山面(黄褐色砂質土・ホーキ火山砂層)で行った。平面形は、東西4.30m・南北4.48mの方形を呈し、溝に囲まれた内側の面積は19.3㎡を測る。溝は幅0.3~0.45mで囲溝をし、深さは0.3m前後の浅いものであった。溝の中には柱穴と思われるピットは存在せず、鋤先等の掘り起こし具で掘り下げた痕跡が認められた。溝に囲まれた内部には、溝に伴うピット等の遺構は無く、ほぼ平坦であった。溝埋土及び平坦面からの遺物は、確認できなかった。

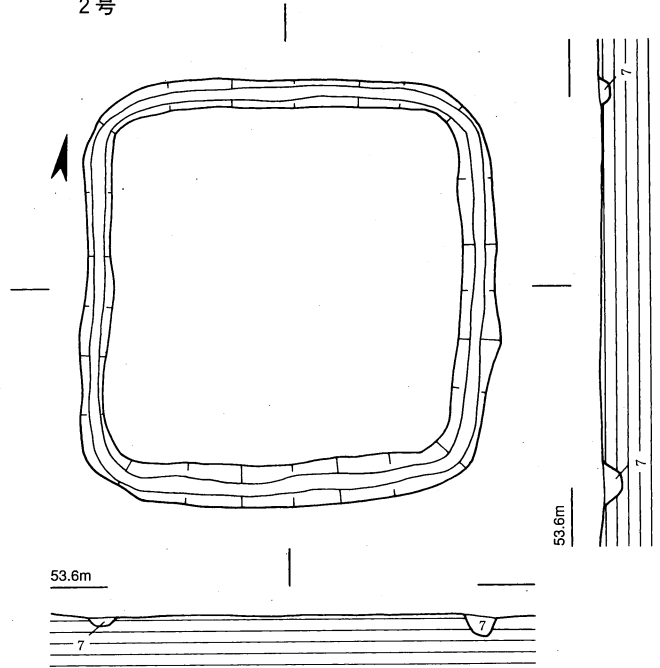
**2号溝状遺構** 調査区の南側の中央付近で検出した。試掘調査の第2トレンチで確認した遺構であり、1号溝状遺構と同じく黒色土上面まで削平された駐車場部分であり、遺構検出は地山面(黄褐色砂質土・ホーキ火山砂層)で行った。平面形は、東西4.3m・南北4.5mの方形を呈し、溝に囲まれた内側の面積は10.4㎡を測る。溝は幅25~35cm・深さ10~20cmで囲溝する。溝に囲まれた内側や溝の中には、南西部にピット状の掘り込みが見られるものの、遺構に伴うものではなく、他の柱穴などの遺構は存在しなかった。出土遺物は1号溝状遺構と同じく、確認できなかった。

**3号溝状遺構** 調査区南西側の旧檜林部分で検出した。この地区は表土から存在しており、断面観察の結果、溝は黒色土下層から掘り込まれていることが確認できた。平面形は、東西4.6m・南北4.5mのやや西側が長い方形を呈し、隅はやや丸く角張る。溝に囲まれた内側の面積は20.7㎡を測る。溝の内側は、黒色土からの検出であり丁寧な遺構検出をおこなったが、遺構の存在は認められなかった。方形に囲む溝は南側で幅0.6m、深さ0.3~0.4mを測り、北側で幅0.2m、深さ0.1mを測る。溝の形態は、1号・2号溝状遺構とほぼ同じものであり、溝の内部には柱穴等の存在はなかった。溝埋土から、非常に小さい破片ではあるが土師器と須恵器の破片が2点出土した。

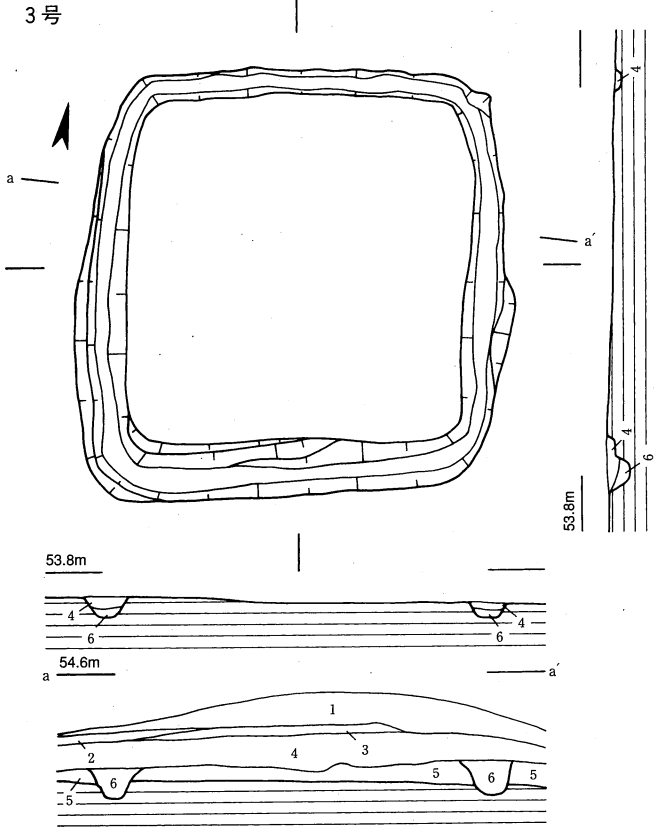
1号



2号



3号



- 1 客土
- 2 表土
- 3 表土
- 4 黒色土
- 5 暗茶褐色土 (地山ホーキブロック含む) 漸移層
- 6 黒茶褐色土
- 7 黒褐色土 (ホーキブロック粒子わずかに含む)

0 2m  
(1:80)

第6図 1号~3号溝状遺構遺構図



## 2 遺物

福田寺遺跡3次調査の出土遺物には、弥生土器と敲石・磨石・台石の石製品がある。出土量は全体的には少なく、出土遺物の大半は弥生土器であり、そのほとんどが1号・2号貯蔵穴からの出土であった。なお、敲石・磨石・磨石兼敲石等の石製品はそのほとんどが調査区西側の黒色土層からの出土であった。

出土した弥生土器はほとんどが弥生時代中期中葉の土器であり、時期的には一時期の様相を示す。器種は壺・甕・高坏で、壺は形態により3種に、甕は2種に分類が可能と思われるが、出土量が少なく器種構成までは復元できなかった。以下、遺構別にその概要を述べる。法量の( )は推定値。

**1号住居** 出土量は少なく、また小片が多く図化できたものは壺と甕だけであった。

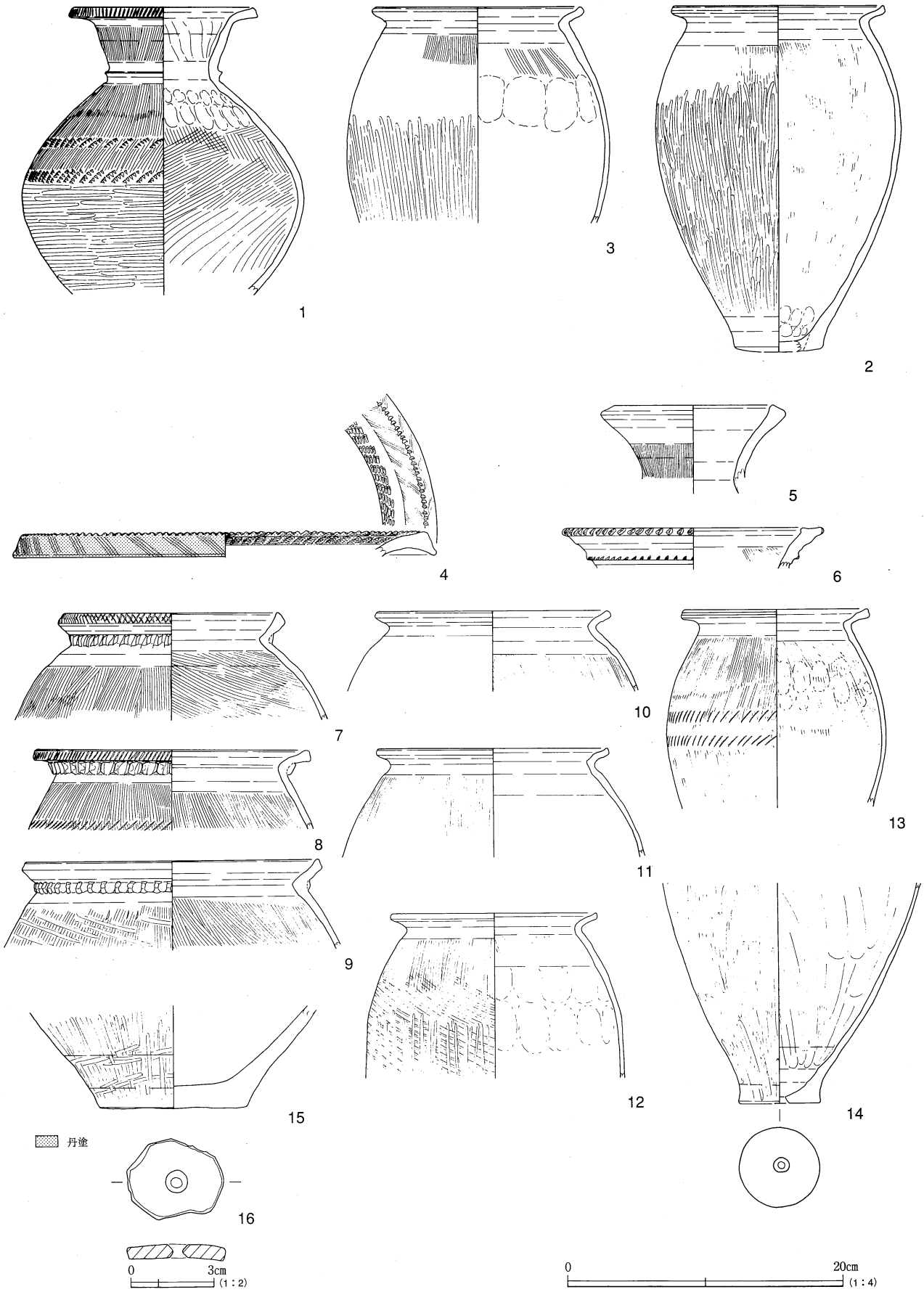
**壺(1)** 口縁部が水平にのび、端部がわずかに肥厚して面をもち、体部は球形。口縁端部に櫛原体による刻み目を施し、頸部下位に1条の断面三角形の貼付け突帯を巡らす。肩は張らず中位に櫛原体による2条の圧痕文を施す。口縁部内外面ヨコナデし、頸部と肩部の外面には縦方向のハケ目調整、胴部最大径以下横方向のヘラミガキを施す。内面は頸部に絞り目を残し、肩部に指頭圧痕を施す。胴部内面は斜方向のハケ目調整を施す。口径13.0cm、最大胴径20.5cm。

**甕(2・3)** 中型で、砲弾形の胴部に「く」の字状に屈曲する口頸部がつく。いずれも口縁端部をわずかにつまみあげる。胴部最大径は中位にある。口縁部内外面ヨコナデし、外面の胴部上位を縦方向のハケ目調整し、下位を縦方向のヘラミガキを施す。内面は頸部以下斜方向のハケ目調整を施し底部指頭圧痕を施す。内面は全体にナデ調整が行われハケ目調整が一部消される。2は口径15.2cm、最大胴径17.8cm、器高は25.2cmを測り、3は口径14.8cm、最大胴径(19.0)cmを測る。

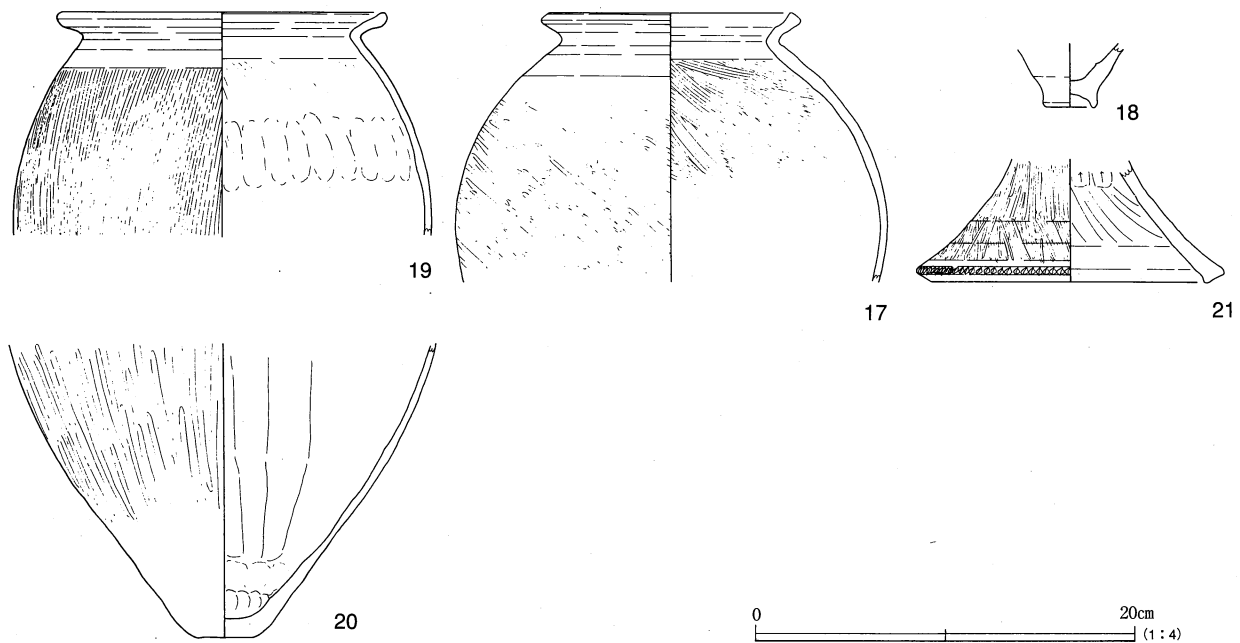
**1号貯蔵穴** 比較的まとまった量の弥生土器が出土したが、完形の土器は無く、また14の甕に見られるように復元できた小片の一片には2次的焼成を受けたと考えられる色の違いがあり、接合する部分で大きく色の変化が認められた。このことから1号貯蔵穴の出土土器は廃棄された可能性が高い。そのほか、弥生土器転用の紡錘車・磨石兼敲石・磨製石斧が出土した。

**壺(4~7・15)** 出土した遺物は小片ではあるが、形態より3種類の器形を確認した。4は口縁端部片であるが、口縁が強く外反し、端部は大きく肥厚して端部が下垂する大型の壺。口縁部の平坦面に櫛原体による連続刺突文が巡り端部上面に刻み目を施す。さらに平坦面の端から下垂端部にかけて連続する櫛描文を斜め方向に施す。5・6は全体がわかる個体ではなかったが、外反する口頸部をもち、口縁部内外面いずれもヨコナデし、口縁端部をわずかに肥厚させる。大型の6は口縁下部に1条以上の刻み目突帯をめぐらす。小型の5は頸部外面に縦方向のハケ目調整し、内面はヨコナデを施す。7は「く」の字状に屈曲する短い口頸部に胴部の張る倒卵形の体部を有する。口頸部に比べ体部が大きいのが特徴となる。口頸部の小片では甕との区別が困難となる。上外方に立ち上がる口縁部は端部でやや肥厚し、端部外面に櫛描文による斜格子文を施す。頸部には貼付けによる指頭圧痕突帯をめぐらす。口縁部内外面ヨコナデし、体部外面上部は縦方向のハケ目調整し、内面は斜方向のハケ目調整を施す。15は大型の底部。口径は順に(29.0)、(11.6)、(18.6)、15.4cmで、15の底径は10.6cmを測る。

**甕(8~14)** わずかに肩の張る砲弾形の体部に「く」の字状の口頸部を有する。口頸部にはヨコナデが施され、口縁端部が僅かにつまみ上げられるのが特徴。完形品は確認できなかったが、口径の法量により2つに分類が可能である。大型のものには頸部屈曲部に貼付けによる指頭圧痕突帯をめぐらすものもある。8・9は口径20cm前後でやや大型。「く」の字状の口頸部を有し、8は端部外面に櫛原体による刺突文がめぐる。口頸部内外面ヨコナデし、外面は縦方向のハケ目調整し内面は頸部以下斜方向のハケ目調整する。8は胴部最大径付近に櫛原体による刺突文がめぐる。10~13は口径16cm以下の小型の甕。いずれもやや屈曲のきつい「く」の字状の口頸部を有



第7图 1号住居·1号貯藏穴出土遺物



第8図 2号貯蔵穴出土遺物

し、口縁端部はわずかに上方につまみ上げる。13は口縁部端部に2条の凹線を施す。口頸部内外面はヨコナデし、外面の頸部以下に縦方向のハケ目調整を施し、下位は縦方向のヘラミガキをする。内面は頸部以下斜方向のハケ目調整し、さらに丁寧にハケ目調整をナデ消すものもある。このうち12には成形技法にタタキが施されわずかにその痕跡がのこり、13には胴部最大径付近に櫛原体による刺突圧痕文が2条施される。14は平底の底部中央に、焼成後の穿孔がある。口径は順に (19.8)、(21.6)、(16.6)、(16.5)、14.7、(13.2) cmで、14の底径は5.8cmを測る。

**紡錘車 (16)** 弥生土器片を転用している。縁の形を整えるため欠き削り、不整形な円形に整えている。大きさは長径3.4cm、厚さ0.5cm、中央の孔径0.7cmを測る。

**2号貯蔵穴** 1号貯蔵穴と同じく弥生土器を中心に、台石・石鋸が出土した。土器は全て破片であり、磨耗の激しいものも存在する。

**壺 (17・18)** 17は「く」の字状に屈曲する短い口頸部に、球形の体部からなる。口頸部に比べて体部が大きいのが特徴。上外方にのびる口縁端部は、わずかに上下に拡張され丸くおさめる。口頸部は内外面ヨコナデ、体部外面は斜方向のヘラミガキ、内面は斜方向のハケ目調整を行う。18は小型の壺の底部。内外面指頭圧痕と丁寧なナデ調整を施す。17は口径 (12.6) cm、最大胴径 (22.7) cm。18は底径2.4cm。

**甕 (19・20)** 19はわずかに肩の張る砲弾形の体部と「く」の字状を呈する口頸部からなる。口頸部はヨコナデし、端部でわずかにつまみ上げられる。肩部以下外面縦方向のハケ目調整し、内面は指頭圧痕と斜方向のハケ目調整後丁寧にナデ調整しハケ目を消す。20は底部外面縦方向のヘラミガキを施し、内面丁寧にナデ調整をする。19は口径 (16.8) cm、20は底径4.0cmを測る。

**高坏 (21)** 坏部を欠いた高坏の脚部。「ハ」の字状に開く単純な形態を呈し、端部はわずかに肥厚し角張る。端部外面に刻み目を巡らす。脚部外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面は丁寧にナデ調整。底径は (14.2) cm。

**石製品** 石製品は、今回の調査で12点出土した。種類は敲石・磨石兼敲石・磨製石斧・石鋸、そして台石である。この内遺構に伴うものは1号貯蔵穴から磨石兼敲石 (S1) と磨製石斧 (S2)、2号貯蔵穴から石鋸 (S3) と台石 (S4) であった。石製品の大半を占める磨石兼敲石は、ほとんどが表土と黒色土が残る調査区西側から出



土した。

敲石 (S12) 石の表面に敲打痕が認められるものを敲石とし、敲打のみのものは1点だけである。石の表裏2面の平坦面部分に敲打痕跡が複数存在する。

磨石兼敲石 (S1・S5～S11) 石の表面に敲打痕と磨耗痕のあるものを磨石兼敲石とした。出土した石製品の大多数を占め、出土点数は8点を数える。表裏2面の平坦面に敲打痕を有し、側面の周縁部に磨耗痕を有するものが多い。平坦面の敲打痕は、1面だけのものや2面とも有するもの、周縁部にも敲打痕を有するものなどバラエティーに富む。中でもS9は焼成を受けており、煤が付着するとともに亀裂を伴う。

石斧 (S2) 1号貯蔵穴から1点出土した小型の磨製石斧。全面丁寧な研磨が行われ、刃部には丁寧な剥離痕跡が残る。

石鋸 (S3) 2号貯蔵穴から出土。珪化木を利用したものである。

台石 (S4) 磨り面があり、磨石とセットになるとみられるものを台石とした。2号貯蔵穴から出土したもので、2次的な焼成を受けており小さく破碎した状態で出土した。

石製品一覧表

No	種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	遺存度	備考
S 1	磨石兼敲石	10.9	9.8	3.4	482	欠損	平坦面の片面磨り、もう片面に敲き。周縁部に磨耗痕跡。
S 2	磨製石斧	5.8	4.3	1.2	52	完存	
S 3	石鋸	10.7	5.0	0.9	90	欠損	
S 4	台石	29.5	27.5	7.6	8.21kg	欠損	焼成による破碎あり。片面の平坦面に磨耗痕が認められる。
S 5	磨石兼敲石	10.8	8.2	4.3	446	欠損	平坦面の片面に磨り、もう片面に敲打痕の凹み1ヵ所。
S 6	磨石兼敲石	5.8	9.2	3.1	224	欠損	平坦面の両面に2～3ヶ所の敲打痕の凹み。
S 7	磨石兼敲石	10.7	8.0	6.3	555	完存	平坦面の片面に磨り、もう片面に敲打痕の凹み2～3ヵ所。
S 8	磨石兼敲石	5.7	6.4	2.7	97	欠損	平坦面の両面に敲打痕、周縁部に磨耗痕。欠損が大きい。
S 9	磨石兼敲石	13.1	9.5	4.6	750	欠損	平坦面の両面に磨耗痕、周縁部に敲打痕。焼成を受けており一部亀裂有り。
S10	磨石兼敲石	10.8	7.2	4.3	340	欠損	平坦面の片面に磨り、もう片面に敲打痕の凹み2～3ヵ所。
S11	磨石兼敲石	9.4	6.4	5.4	432	完存	平坦面の両面に敲打痕と周縁部に磨耗痕。
S12	敲石	9.1	5.7	3.5	246	完存	平坦面の両面に2～3ヶ所の敲打痕の凹み。

## IV まとめ

今回の調査では、弥生時代中期の集落の一部分を検出した。昭和50年に確認調査を実施した福田寺遺跡1次調査地に隣接し、検出した遺構や出土遺物の性格も非常によく類似しており、同じ集落の一部分と考えられる。ここでは出土遺物の弥生土器と遺構についての若干の検討を行いまとめとする。

### 弥生土器について

福田寺遺跡3次調査で出土した土器は全て弥生時代中期の土器である。山陰地方の弥生土器編年における中期の位置付は、篋描き文から多条化した櫛描文の出現、櫛描文の盛行、凹線文の盛行と櫛描文の衰退をその基準として3時期の前葉・中葉・後葉に区分されることが認められている。今回出土した弥生土器は、この中期中葉の様相をもつものとする。壺は、最大径を胴部中位に持つ球形の体部に、朝顔形に外反する口頸部を持つもの(1・4)、大きく外反する口頸部をもち、口縁部下に刻み目突帯を巡らすもの(5・6)、口頸部が「く」の字状に屈曲し胴部の張る倒卵形の体部を持つもの(7・17)の3種類が出土した。甕は、わずかに肩の張る倒卵形の体部に短い「く」の字状の口頸部を持つもので、分量により2種類に分類することができた。「く」の字状に屈曲する口縁は短く、端部でわずかに上方につまみ上げられるだけで、大きく端部が拡張せず凹線を施すものも13だけと少ない。

以上、少ない出土土器の中から壺と甕を中心にその特徴を概観した。そのなかで壺・甕とも体部内面の調整技法は、大部分が斜方向のハケ目調整とナデ調整であり、中期中葉の終わりからみられるヘラケズリ技法は両者の内面にはまったく確認できず、福田寺遺跡の土器の時期の特徴を示すものとする。また、甕の口縁部は中型から小型のものであったため口縁端部を上下に拡張した、いわゆる「はね上げ口縁」と呼ばれる口縁部の出土が少なく、この点においても福田寺遺跡の土器は中期の古い段階に比定できるものと判断する。倉吉地域では、この時期にあたる出土遺物は、環濠集落を検出した後中尾遺跡の住居と貯蔵穴からの弥生土器が知られている。

### 遺構について

検出した遺構は少なく住居1棟・貯蔵穴2基そして溝状遺構3基だけであった。この内住居と貯蔵穴を含む集落の時期は、出土した土器から弥生時代中期中葉に位置し、遺構の検出状況から調査範囲は集落の南側の部分にあたると思われる。このため集落の本体は1次調査地と3次調査地に挟まれた丘陵尾根の北側斜面に所在するものと推定される。

溝状遺構は3基検出した。いずれも幅30cm・深さ20cm前後の溝が一辺4.3m前後で方形にめぐる遺構で、検出した3基の溝状遺構が心々18mの間隔で同一線上に並び、同一規格で同一規模のものであった。溝の中にも溝で囲まれた平坦部分にもピットなど溝状遺構に伴う諸施設は検出できなかった。遺構の検出状況は、1号・2号が表土等の上層の削平により黒色土下層の漸移層からの検出であったため、遺構の掘込み状況の確認がやや不正確であったが、最後に検出した3号が黒色土下層からの掘込みであり、表土などからの攪乱を伴う掘込みではないことを確認した。このことは1号・2号の検出時点では、溝の掘り方と規格制を伴っている溝の検出状況から、2基の溝状遺構は表土から掘込まれた非常に新しい農業関連の掘削溝の可能性も考えられると判断していたものが、3号の検出により表土から掘込まれた攪乱の溝ではないと判断した。しかし非常に出土遺物が少なく、かつ溝状遺構に伴うピット等の諸施設が無い<sup>註1)</sup>ためその性格は不明である。

この遺構に類似するものとしては、溝を巡らした住居址、いわゆる大壁住居と呼ばれる<sup>註1)</sup>壁立式建物がある。倉吉地区では倉吉市和田の夏谷遺跡<sup>註2)</sup>で大壁住居状遺構が検出されている。規模は福田寺遺跡の遺構に比べやや大きく、一辺12m前後の方形のプランを有し、幅0.5~1.0mの溝が巡るものである。溝の中から比較的多くの遺物

が出土した。しかし今回検出した遺構は、大型のものではないことや溝が布掘状でないこと、さらに溝のなかに柱穴を伴わない点など、その規模とともに多くの相違点があり壁立式建物と同一のものと判断するのはやや困難と思われる。その他の類例を見ると福田寺遺跡の遺構に類似するものとして、淀江町妻木晩田遺跡の妻木山地区で検出されたSB135やSB136<sup>註3)</sup>がある。これらの遺構は幅30cmの溝が方形あるいは長方形に囲むものでSB135が長径5.0m・短径4.6m、SB136が長径3.8m・短径3.18mの大きさであり、壁立式建物の住居と考えられているものである。今回検出した溝状遺構は、規模的にもまた溝の大きさもほぼこの妻木晩田遺跡で検出された住居に類似しており、遺構としては住居と考えるのが妥当と思われる。しかし福田寺遺跡の遺構を直接に妻木晩田遺跡の遺構と結びつけることができるのか、あるいは規格制に富む遺構を住居と考えることができるのか多くの問題点を残すこととなった。今後の新たな資料の出現を待って検討したい。

#### 註

- 1 宮元長二郎 『日本原始古代の住居建築』 中央公論美術出版 1996
- 2 森下哲哉・加藤誠司他 『夏谷遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1996
- 3 淀江町教育委員会岩田文章氏のご教示による。

#### 参考文献

- 花田勝広 「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』第39巻4号 考古学研究会 1993
- 中原 斉 『下山南通遺跡』 鳥取県教育文化財団 1986
- 谷口恭子 『岩吉遺跡Ⅲ』 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991



△調査後全景（北東から）

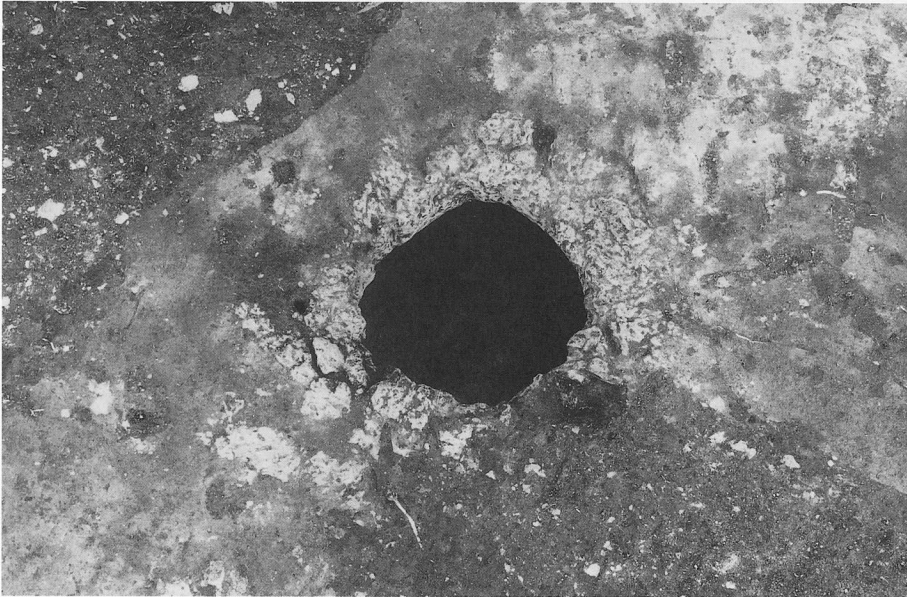
▽調査後全景（南東から）



図版 2



1号住居（南から）



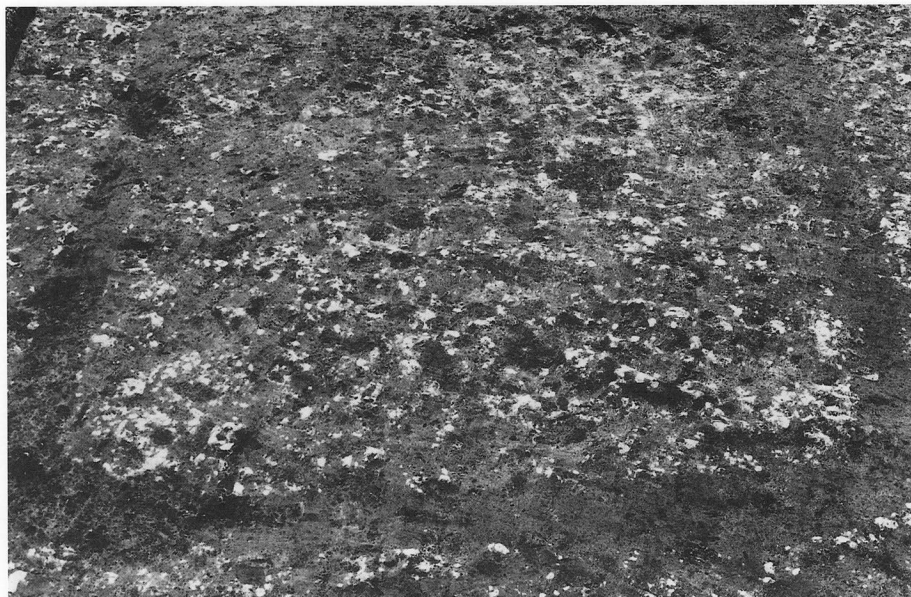
1号貯蔵穴（南東から）



2号貯蔵穴（南東から）

1号溝状遺構 検出面

(北から)



完掘

(北から)



2号溝状遺構 検出面

(東から)





図版 4



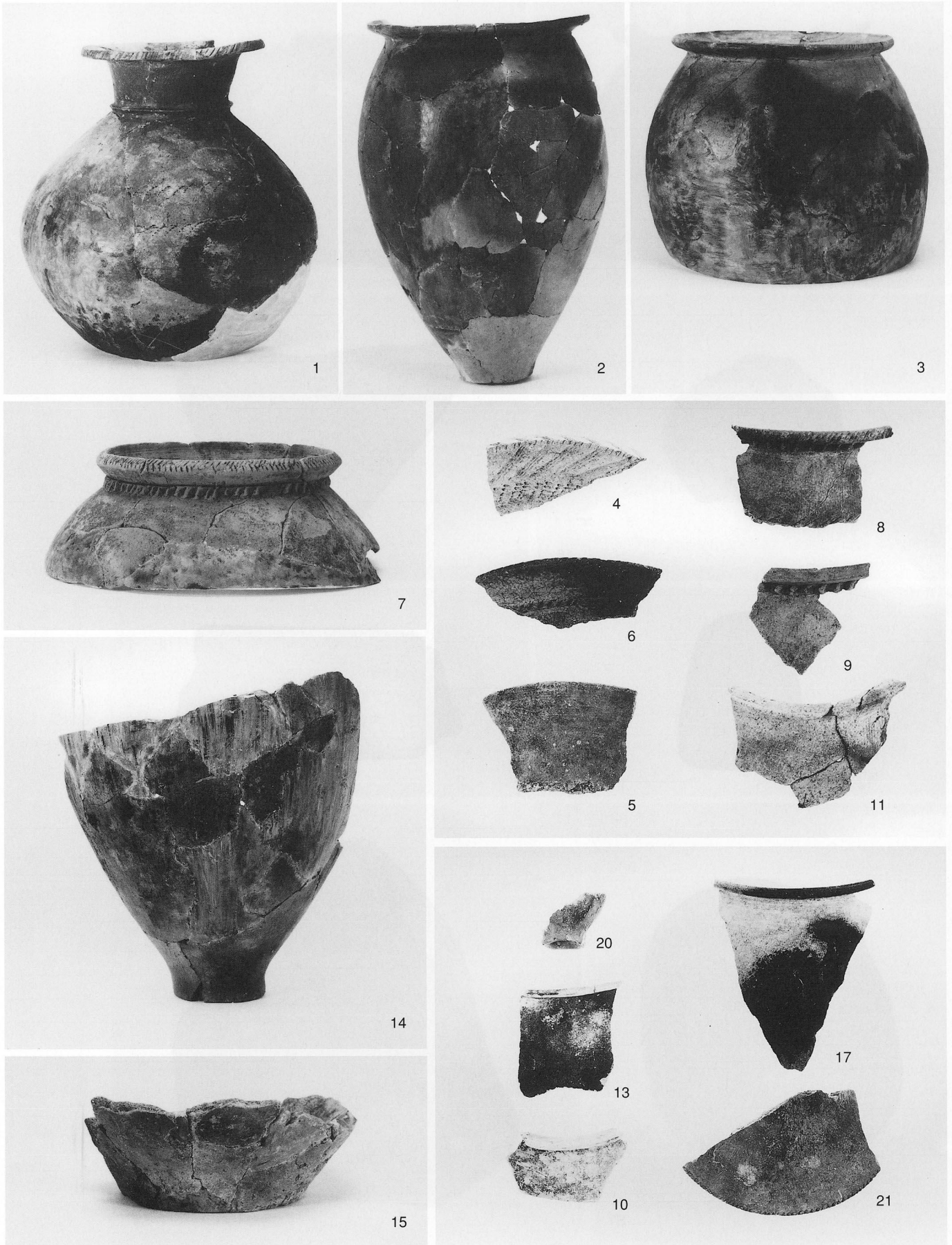
2号溝状遺構 完掘  
(北から)



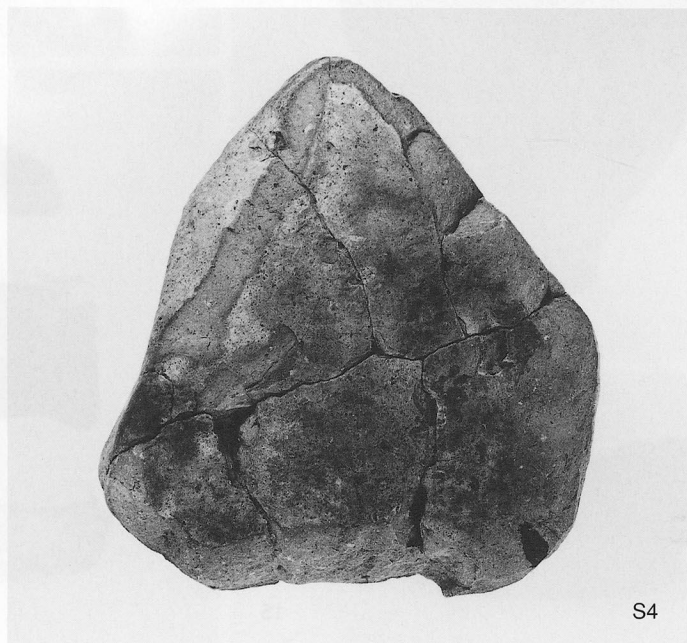
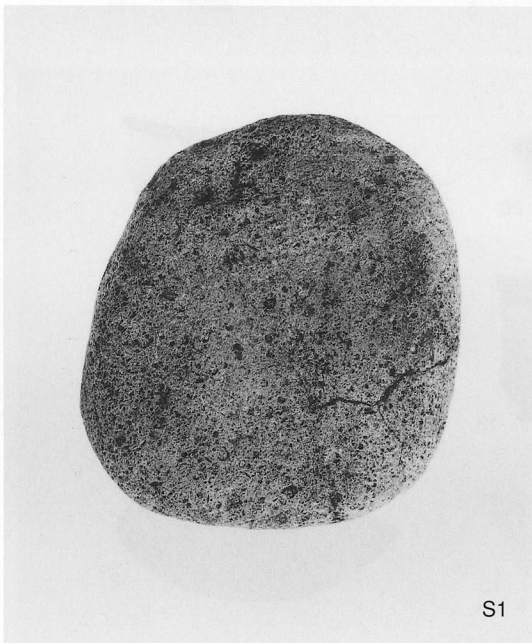
3号溝状遺構 検出面  
(北から)

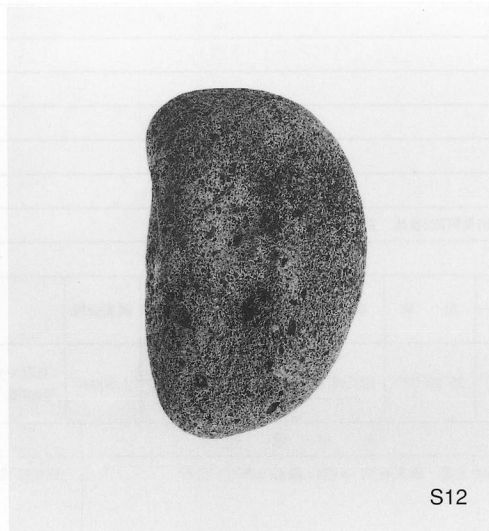
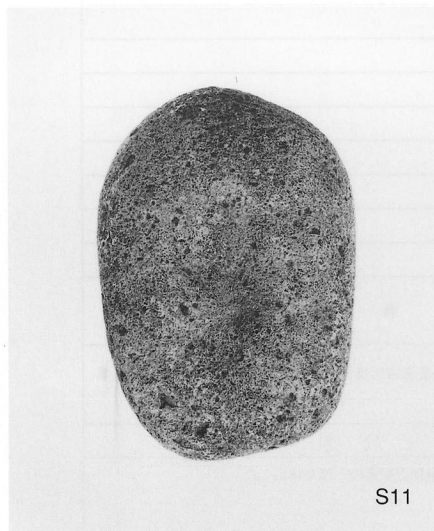
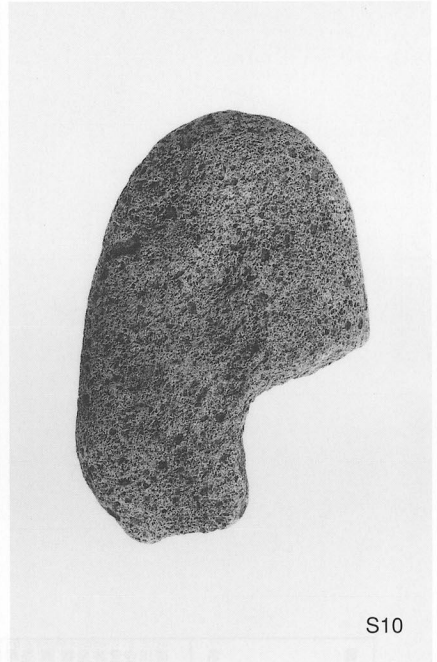
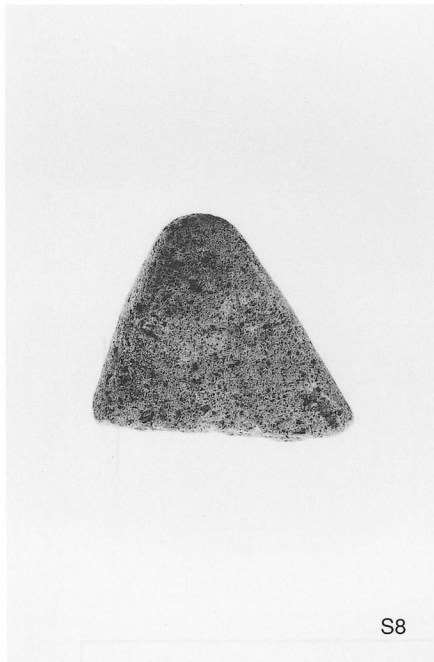


3号溝状遺構 完掘  
(北から)









210.2
Kur
(105)

図書館

報告書抄録

書名	福田寺遺跡発掘調査報告書 (3次調査)							
副書名	_____							
巻次	_____							
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第105集							
編著者名	森下哲哉							
編集機関	倉吉市教育委員会							
所在地	〒682-8611 鳥取県倉吉市葵町722番地 TEL 0858-22-4419							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村：遺跡記号						
福田寺遺跡 (3次調査)	倉吉市横田字福田寺	31203 : 3 NYF・3		35°25'32"	133°46'36"	19991004~19991209	1,500㎡	鳥取中央農業協同組合横田物流センター増設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構		主な遺物			特記事項	
福田寺遺跡 (3次調査)	集落	弥生：竪穴式住居 1棟 貯蔵穴 2基 溝状遺構 3		弥生土器・磨製石斧・石鏟・敲石・磨石・台石			弥生時代中期の集落の一部を検出した。	

---

# 福田寺遺跡発掘調査報告書

(3次調査)

平成12年3月31日 印刷

平成12年3月31日 発行

編集 倉吉市教育委員会

発行 勝美印刷株式会社

---